



TITLE:

静脩 Vol. 39 No. 3 (2002.12) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 39 No. 3 (2002.12) [全文]. 静脩 2002, 39(3)

ISSUE DATE:

2002-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/66044>

RIGHT:



## e-プリント・アーカイブの衝撃

理学研究科 教授 九 後 太 一

### 1. インターネット

情報革命とかITと言われて久しい。しかし私がそれを本当に実感したのは次のような「小さな体験」を通してであった。

私は今春、専門外の一般の人々を対象に、「素粒子論の発展」について話をするよう依頼された。「理論物理学の特質は、『何か未知のものの存在』を論理的に予言するところにある。」ということをお話そうと思った。歴史的に分かりやすいところからの例として、その時に思いついたのが冥王星の話である。海王星が何か奇妙な動きをするというのでその原因として冥王星の存在が予想された。海王星のデータから理論的な計算のすえ冥王星の軌道が予言され、その予言にかなり近いところに実際に発見された、という話をどこかで聞いたのを思い出したのである。ところが人に話をするにはそれが一体いつの話で、理論的な予言をしたのが誰で、そして実際の発見者は誰なのかくらいは知らないといけな。そこで私は理化学事典や物理学事典を調べてみたのだが、どれにも載っていない。大変困ってしまった。

ところがそれを調べていた部屋に、私の研究

室のある大学院生が来たので「何で調べれば載っているだろう」と話すと、彼は即座に「そんなのは簡単ですよ。インターネットで調べれば一発です。」果た



して、Googleの検索画面を開き、「冥王星 海王星」というキーワードをいれてたただけ、たちどころに横浜こども科学館ほか1万5千件が引っかった。トップの横浜こども科学館につながると、NASAやローウェル天文台のページへリンクがあり、それこそあつという間に「冥王星（Pluto）は、海王星（Neptune）の軌道を横切る惑星としてP. LowellとW.H. Pickeringによって予言され、1930年に、Lowell天文台の天文学者C.W. Tombaughによって発見された。」という確かな情報が得られたのである。

この「事件」は私にはショックだった。私には先ず事典を調べるという旧来の発想しかなかったのだが、時代はもうはるか先に行っている

のである。ちなみにこの大学院生は、論文の自分の英語の使い方が正しいかどうかを調べる時にも、英和辞典は使わず、Googleにそのワードを打ち込んでいっぱい引かかる文例を見るとのことである。

## 2. 論文作成とプレプリント

私が大学院に入学したのは1971年であるが、そのころの素粒子論分野での最新の研究情報というのはプレプリントであった。新しい研究成果が出て論文を書きあげると、先ずもちろん学術雑誌に投稿する。同時に、その原稿を200～300部（大きな研究所では500～1000部）印刷してそれを全世界の主だった研究所や関連の研究者に直接郵便で送るのである。この印刷物が「プレプリント」と呼ばれていた。

このプレプリント作成作業が大変だった。先ず、印刷するためには「十分美しいタイプ原稿」を用意しなければならない。それにふつうの研究者はタイプを打てなかったので、先ず手書きの原稿を用意して秘書さんにタイプしてもらう。我々の分野ではギリシャ文字などの特殊な文字や数式が多く含まれているのでその部分はタイプ原稿では適当な空白を空けておいてもらい、後で手書きで入れるのである。また論文が図を含んでいたりすると、製図用の烏口や雲形定規などを使ってインディアンインクで美しく描かねばならない。

このようにしてできた原稿を、次に印刷し「製本」（頁をそろえてホッチギスで止める作業）しなければならないが、この部分は当初は印刷会社に外注していた。しかしこれは時間もお金もかかるというので、その後、印刷は教室内の事務の人にやってもらうようになり、オフセット印刷の美しい仕上がりのものになった。「製本」は著者自身が手作業でやっていた。一時コレクターと呼ばれる割合高価な機械が教室に入ったこともあるが、よく調子が悪くなり、機械を直しているより結局手でやるのが速かった。そ

して最後は、発送作業である。これも切手貼り、研究機関宛名のラベル貼り、個人的な送り先の宛名書き、などひと仕事である。

## 3. プレプリント・システム

プレプリントは、このように作成も大変で、いろいろ手間や費用がかかったが、自分の研究をいち早く世界の研究者に伝え、また他の研究者の最新の研究成果を知るために、もっとも効果的な方法であった。もちろん学術雑誌に投稿された論文はゆくゆくは雑誌に掲載されるのだが、査読者の閲読・判定や印刷・校正などに時間がかかる。実際に刊行された雑誌で研究者が論文を見ることができるのは、半年後くらい（きわめて早い場合でも3ヶ月、遅いと1年以上）になるので、発展の速い我々の分野ではプレプリントの果たす役割は絶大であったのである。

このように世界中に出回っているプレプリントの情報については、それぞれの研究機関が1週間に受け取ったプレプリントを毎週リストにし現物を書架に展示するというをしていた。例えば私のところでは、基礎物理学研究所と物理学教室がそれぞれでリストを作り、お互い情報を交換していた。このプレプリントの管理およびリスト作りは、論文のタイピングの仕事と並ぶ教室の秘書さんの大きな仕事の一つであった。いつの頃からか正確ではないが、1980年代にはSLAC（Stanford線形加速器センター）が、受け取ったプレプリントをリストにし毎週毎週、全世界の研究機関に送付するというサービスをボランティアにやり始めた。このリストには著者名、研究機関、タイトル、ページ数が小さな字でぎっしり書き込んであった。興味がある題名の論文をリストに見つけると、自分の研究機関に来ていなければ、直接著者の研究機関にプレプリント請求のはがきを出すのである。

このようなプレプリントを中心にした最新研究情報交換のシステムはずいぶん長く維持され、結局1992-3年ごろまで続くのである。しかし、転換の兆しは1987年頃にやって来た。数学や物理学の分野での新しい論文清書システム TeX の登場である。

わが物理学教室の理論グループでは、上述のプレプリント・システムでの論文作成をより効率的にするため、1980年頃に一台目の、1985年頃に二台目のIBMのワードプロセッサを導入した。どちらもその時代のかかなり最先端のもので、数百万円もしたと記憶している。しかし、どちらもギリシャ文字を打つには印字部の「ボール」や「カエデ」をいちいち交換せねばならず、数式をきれいに打つことはさらに難しかった。だからこれらの高価なワープロを購入しても、数式部分は依然として手書きで書き加えていたのである。

ところが、1987年の中頃から研究室にTeXのシステムが導入された。これは、パソコンの上で5インチフロッピー1枚に入ったプログラムで動き、ギリシャ文字はもちろん数式も全く自由に書け、アウトプットも極めて美しい画期的なフリーソフトウェアだった。このTeX システムは、前年1986年末に私が米国のSanta Barbara研究所に滞在した折には、既にその研究所では各部屋で使えるようになっていた。その後、TeX は、日本にもヨーロッパにも急速に普及した。

#### 4. e-プリント・アーカイブ

このTeX の普及が情報交換に本質的な変化をもたらすことになった。すなわち、1991年8月からLos Alamos国立研究所でPaul Ginspargが始めたe-プリント・アーカイブである。これは最初、Ginsparg が自分の専門の素粒子論のストリング理論や2次元量子重力の分野で、200人程度のユーザーを想定して始めたプレプリント・データベースで、高エネルギー物理学の理

論 (High Energy Physics -- Theory) という意味で hep-th と名付けられた。その分野のプレプリントを、ハードコピーではなくTeX ソースファイルの形でコンピュータ上にストアしておき、世界中どこからでもLos Alamosにアクセスしていつでも瞬時に取り寄せられるというシステムである。名前を登録した研究者には、一定期間毎に (現在ではweekday毎日) アーカイブに新しく投稿された論文の、題名、著者名、アブストラクト、がe-メールで送られてくる。もし本文を読みたい論文があればLos Alamosにアクセスして取り寄せるのである。

ところが始めるや、hep-th のユーザーは2,3ヶ月後には1,000人に、2,3年後には4,000人にもなった。程なく、hep-th以外にも、高エネルギー現象論 (hep-ph) 原子核理論 (nucl-th) 物性物理学 (cond-mat) 数理物理学 (math-ph) 数学 (math) などを初めとした物理学や数学の数々の分野 (現在15) のe-プリント・データベースが次々と開設され、同じく数多くのユーザーを抱えるようになった。

このe-プリント・アーカイブに保存されるのは、ふつうの場合、論文 (プレプリント) のTeX ソースファイルと、論文中に現れる図のポストスクリプト形式のファイル、などの一組である。物理学や数学の論文をこのようなe-プリント・アーカイブに保存することが可能になったのは、コンピューターとネットワークの発達とともにTeX のおかげなのである。TeX によって手書き部分の無い完全原稿がデジタルデータとして用意でき、コンパクトなサイズのe-プリント・アーカイブが可能になった。スキャナーで画像情報として取り込んだ場合はファイルが馬鹿でかくなるだけでなく、情報の2次利用にも使えない。

e-プリント・アーカイブは、最初の2年ほどは、研究者からの論文投稿はe-メールで送付し、アーカイブから読みたい論文はftpで取り寄せる、という方式だった。しかし、1993年の12月

には WWW (World Wide Web) のインターフェイスが用意され、以後論文取り寄せは Web から download する方法が主になり、1996 年 6 月には、論文投稿の方も Web Upload ができるようになった。また、全世界に 17ヶ所のミラーサイトが用意され、世界のどこからでも素早く download できるようになった。

我々の分野の研究者には、この e-プリント・アーカイブと同じくらいよく利用しているデータベースがもう一つある。SLAC が提供している SPIRES (Stanford Public Information REtrieval System) の 高エネルギー物理学 (HEP) 文献データベースである。これは先に述べた 1980 年代のプレプリント・システムの時代から SLAC が DESY (ドイツ電子シンクロトロン研究所) と共同プロジェクトとして始め、1974 年以降の高エネルギー物理学分野のほぼ全てのプレプリント、学術誌掲載論文、会議録などの、50 万件以上の情報を集めた巨大なデータベースである。収録されているのは、論文の題名、著者名、プレプリント番号、e-プリント・アーカイブでの登録番号、掲載済み場合は、掲載雑誌名、年号、巻、ページ数、等の情報である。1993 年 6 月にはいち早く WWW で利用できるようになり、現在では、e-プリント・アーカイブや掲載雑誌のオンラインページへのリンクが張っており、直接その論文の内容を見ることもできる。



e-プリント・アーカイブの日本のミラーサイト (<http://jp.arXiv.org/>)

SPIRES は、この分野のほぼ完全なデータベースで極めて便利なものである。昨今、自分の論文の被引用回数を調べさせられる機会が増えたが、これなど朝飯前で、著者名を打ち込むだけで 1974 年以降の全論文に関してすぐさま被引用回数を答えてくれるし、被引用回数でランク分けした論文の度数分布 (成績表!) まで出すこともできる。もっと創造的な使い方は、例えば、何か人の話を聞いたり、論文を読んだりして新しいテーマの研究を始めようとする時、先ずその人の当該の論文を SPIRES で検索する。その検索結果の下のある部分をクリックすれば即座に「その論文を引用している論文」を全てリストアップしてくれる。それを調べればそのテーマの最新の状況がわかるのである。これは「未来への検索」であり、データベースが無ければ決してできなかったことである。また、昔は論文を書いた時、最後に参考文献の情報を完全にする作業が面倒だった。昔読んだ文献等の場合、うる覚えの年号等を頼りに図書館の書庫で、雑誌の巻末の索引を手当たり次第に探すという作業をよくやった。しかし、今は SPIRES を立ち上げるだけでこの作業がすぐにできるのである。

## 5. 新しい図書館へ

この e-プリント・アーカイブのシステムは、非常に大きなインパクトを持っている。

1) 先ず、先行する上述のプレプリント・システムは、この e-プリント・アーカイブの普及に伴い、完全に取って代わられた。すなわち、上で説明したような、印刷、発送の手間と費用から完全に解放されたのである。

2) (我々の分野では) ほぼ全ての論文が e-プリント・アーカイブに投稿されるため、従来の学術雑誌に載るよりはるかに早く、世界中のあらゆる場所でリアルタイムで読むことができるようになった。



3) しかも、学術雑誌に載った後でも当該の論文はアーカイブに残っているので、掲載雑誌を所属大学・研究所が購入していなくとも、ネットにつながっているパソコンやコンピューター端末がありさえすれば、部屋にいながらにしていつでも即座に読み、プリントすることができる。

このことは従来の学術雑誌のあり方、存在意義に対して深刻な挑戦を突きつけている。従来の紙版の学術誌というのは、その論文の印刷・製本・配布・蓄積・コピーということが難しかった時代に生まれてきたものである。それゆえ、投稿された論文は同じ専門の研究者に慎重に査読され、パスしたもののだけが印刷に回される。査読という点は、論文の質に対する一定の保証を与えるもので現在の電子化の時代でも従来の学術誌の果たす「役割」の重要部分と見なされている。が、まさにその点が出版に時間がかかる元凶でもある。e-プリント・アーカイブは、(コンピューターによる自動的なチェック以外)この査読部分を全く無くし、また、論文の受理から公開まで徹底して自動化したシステムであり、それを維持するコストは従来の学術誌出版などに比べて2桁も安い。

私は、実は、湯川博士の始めた「Progress of Theoretical Physics」という雑誌の編集委員をしており、その関係で、2000年に発足した物理系学術誌刊行協会IPAPの理事の一人である。アメリカでは、Physical Reviewを初め物理学関係の10学会<sup>86</sup>誌の学術誌が合同でAIPという組織を作っている。日本でも物理学関係の学術誌がIPAPという合同組織を作り、この電子化の流れの中でリーダーシップをとり、日本を物理学の分野でもアメリカやヨーロッパに並ぶ情報発信の第三極とすべく設立された。IPAP傘下の学術誌も、AIP傘下のそれと同じように従来の紙版の雑誌のオンライン化を強力に進めている。しかしながら、それを進めれば進めるほど自身の経済的存立基盤を掘り崩すディレンマを抱えている。Web上で雑誌の論文を読める

ようにすると先ず「課金するのだろうか?」という難問に遭遇する。課金する方法という技術的な問題以上に、「課金すればその雑誌を読んでもくれなくなり、ひいては投稿も減る。」という、より深刻な問題である。上述のe-プリント・アーカイブのような無料のアーカイブにほぼ同じ論文のコピーがある時に、わざわざ有料のWebに誰がアクセスするだろうか?

図書館も、同じく、その存在理由を問われている。我々の分野の多くの若い研究者は今や、学術雑誌を見に図書館に行くことは減多にない。先ず、最近の参考文献に関してはそれが学術誌に掲載されていようがいまいが、全てe-プリント・アーカイブからdownloadする。e-プリント・アーカイブに投稿されていないような古い論文の場合にも、掲載雑誌のWebに置かれているPDFファイルをとってくる。あるいは、SPIRESのデータベースに昔のプレプリントのスクリーンイメージがリンクされていないか見る。それでもだめな場合に初めて、図書館に行くのである。こういう状況では、従来の学術誌を従来通り書庫に並べただけの図書館では利用がますます減るだろう。大学全体で学術誌をオンラインで見られるようサイトライセンスをとる手配をし環境を整える、というのも重要な仕事であろうが、それだけでは図書館に将来はないだろう。

図書館は、いまや、より積極的にローカルな情報の収集・蓄積という仕事に取り組むことが重要であろうと思う。例えば、京都大学の博士論文・修士論文の収集である。博士論文などは論文として学術誌に発表されている内容もあるが、全く独立に書き下ろされたものもあり、外部からは入手が難しい。いわんや修士論文などはそうだろう。そういうものを収集して外部からオンラインで検索・閲覧ができるようにするなど、創意工夫をもって積極的に情報を発信する基地になる必要があるだろう。いま時代は動いている。

(くご たいち)

## 附属図書館の珍本 公開展示『学びの世界』の選書から

京都大学人文科学研究所東方部 助手 宮 紀 子

それは、今年4月のある日届いた一通のE-mailからはじまった。差出人は文学研究科国語国文学研究室の木田章義教授。用件は、前月、附属図書館所蔵の『幼学指南鈔』が重要文化財に指定されたことをうけ、「学びの世界 中国文化と日本」と題する展示会を開催するにあたっての協力要請である。木田先生とは、ほかに要請を受けた同僚の古勝隆一、古松崇志、研究員の井上充幸の各氏とともに文部科学省の特定領域研究(A)『古典学の再構築』の領域横断研究「日中韓版本研究班」等でご一緒させていただいており、今回の依頼も、まさに展示会のテーマと研究班のテーマが重なるが故であった。『幼学指南鈔』が、中国唐代の類書とよばれる一種の辞典『芸文類聚』、『初学記』の影響を受けて作成された書物であることから、漢籍では、日本への中国文化流入の第二波といつてよい<sup>14</sup>世紀(日本は鎌倉室町時代)の大元大モンゴル<sup>ウルス</sup>国治下の出版物、なかでも類書と中国文化の受容を語るうえで欠かせない五山の禅籍を中心に且つできるだけ多くの貴重書を紹介するというのが私たちに与えられた課題であった。古勝氏がここ数年調査されてきた重要文化財を多数含む清原家の旧蔵書(清家文庫)を、古松氏が自身の研究課題のひとつである五山禅籍を担当するというのは、当初より決まっていたが、困ったのは残りのセクション。率直にいつて、貴重書庫でひととおり見た限りでは、元刊本をはじめ骨董的価値のある漢籍善本は五山関係のものがほとんどである。ならば、普段の研究でわかってきたこと、多くの機会に話してきたことを、じっさいにモノそのもので表現、発信してみたい。

朝鮮の王や貴族、日本の五山僧にも読まれた『事林広記』という大元時代に作られた挿絵入

りの類書 百科事典がある。この類書は、じゅうらい挿絵があること、福建省の書肆が立ち並び建安で刊行された本であること、内容が占いや医学、薬学、数学、双六や囲碁等の遊戯、音楽など多岐に亘ることから、“民間の”日用類書だとされてきた。複数の元刊本、明刊本、抄本、和刻本があって、内容も少しずつ違うために、これら共通のものと祖本をさぐるという少々不毛な試みもなされている。しかし、ここ五年ほど、国内外に所蔵される同時代に刊行されたさまざまな分野の書籍の調査、挿絵の写真の収集を行っているうちに、この書がじつは、ありとあらゆる分野のことをヴィジュアルに広く知りたいという、モンゴル時代特有の精神に基づいて、既存の書籍の挿絵、内容を抜粋して寄せ集めたテキストであることがわかってきた。大元時代までの漢籍をひととおり集める作業は自家版『事林広記』を作ることにほかならない。そもそも算法、吏文、医薬、卜筮などの学問は、決して商人や胥吏、医者、薬屋、占い師等の専売特許なのではなく、モンゴル時代の文人たちも、「儒者は一事の不知を恥とする以上、雅論でなくとも究めざるを得ない」として、最低限の教養として学んでいたのである。実学の勉強は、かれらが奉じた朱子学自体が多分に推奨していたことでもあった。

「類書は雑学の書にもとづく」 附属図書館の貴重書の中にもこれを実証できる、しかも珍しい資料はあるだろうか。朝鮮、日本の人々がいかに消化したかをうかがい知ることのできる資料はあるだろうか。ちょうど井上氏も『事林広記』を基点としてそれと連動する『六経図』や宋代の拓本など図像資料とその他の類書を扱うことになったので、展示としても一貫性はある。こうして書庫内での探索がはじまった。以

下に、じゅうらい重要視されてこなかった貴重書の書誌を紹介したい。

(1) 陽村先生入学図説 前後集 (高麗・朝鮮) 権近撰 高麗恭讓王二年 / 洪武二三年 (1390) 完成、朝鮮世宗七年 / 洪熙元年 (1425) 刊行 一帙一冊 外寸二七・三 × 二〇・二cm 板框一七・三 × 一五・八cm 朝鮮版、楮紙、一四行 × 二二字、四周单边、有界、版心白口 内向二葉花紋魚尾 刊記：洪熙乙巳夏晋州牧繡梓備考：洪武庚午 (1390) 権近序、洪武戊寅 (1398) 夏五既望三峰道人鄭道伝識、洪熙乙巳 (1425) 秋七月壬申門人正憲大夫芸文館大提学集賢殿大提学知經筵同知春秋館事兼成均大司密山卞季良跋 河合文庫 二 7 <199559>

洪熙元年の『入学図説』は、現行のテキストでは、大東急記念文庫蔵の洪武三〇年 (1397) に晋陽で刊行された二巻本の木活字本に次いで古く、韓国にも所在を二カ所しか聞かない希少な版本である。封面は大元時代の出版物の影響を濃厚に感じさせる。ただし、高麗大学校晩松文庫に、やはり「洪熙乙巳夏晋州牧繡梓」の刊記を有し、版式が全くことなるテキストがあり、こちらが初版で、河合文庫本が後刻である可能性もある。

(2) 大易断例ト筮元龜 (大元時代) 建安 蕭吉父撰集 大德十一年 (1307) 刊、書写年不詳 一帙二冊 外寸二六・二 × 一九・四cm 板框二三・三 × 一七・七cm 第一冊：抄本、九行 × 二八字、注双行、四周单边、有界 / 第二冊：抄物、八行字数不一、注双行、四周单边、有界 刊記：昔大德十一 夏五平水進德齋為記 備考：各冊第一葉に宗密 (白文)、大通 (朱文) の印 1 - 62 タ 1 貴 <64452>

一冊目が大德十一年刊本の抄本で上巻のみを収める。目録には、上巻として「総例」「六神」の二門を記すが、じっさいには、さらに「天時地利」から「胎息」まで計十五門を収録する。二冊目は一冊目の「総例門」「六神」に対する注釈で『鬼谷断』『鑑明断』など佚書を引用、

注釈者は、大通と考えられる。『ト筮元龜』は、明朝廷の図書目録である『内閣蔵書目録』『技芸部』に鈔本一冊を記録するが、現在では、国外ではただ一カ所、中国江蘇省鎮江博物館に清代の抄本が所蔵されるのみで、しかも全八巻からなるといい、本書とは別系統のテキストである。国内では、名古屋蓬左文庫駿河御譲本の天正六年 (1578) が上中下巻のうち後ろの二巻を、大東急記念文庫の室町末期抄本が巻下一巻を蔵するほか、足利学校、大阪府立図書館等数箇所に寛文六年 (1666) 二條通鶴屋町田原仁左衛門所刻の抄物が伝わる (ただし、寛文六年の抄物と本書第二冊の抄物はまったく別物である)。したがって、上巻のテキストは、世界でおそらくここにしか存在しないわけである。モンゴル時代に流行した占い「断易」のテキストは、『事林広記』『卜史』にその一端をうかがえるものの、こんにちあまり残っておらず、学術的な価値もひじょうに高い。本書を刊行した「平水進德齋」は、至大三年 (1310) には、金末の文人元好問の『中州集』を出版したことで知られる。平水は、金朝以来、華北の出版の中心地で、精緻な版刻技術を有し、はやくから版画、纂図本も登場していた。断易の流行には、モンゴル朝廷の庇護をうけた華北の道教教団、全真教がかかわっている可能性が大きい。平水は全真教ゆかりの地でもあり、それを示唆する資料としても貴重である。

(3) 新鐫徽郡原板夢学全書 二巻 (明代) 撰者不詳、書林 楊玉琳梓行 刊行年不詳 一帙一冊 外寸二三・七 × 一三・七cm 板框一九・四 × 一一・八cm 明刊本、上中下三段 (上図下文) 四周双边、白口、有界 封面：半留堂新刻 / 解夢靈書 / 書林楊玉琳發行 近衛文庫 8 - 80 ム1 <1116621>

中国国家図書館に同名の書があるが、首巻および三巻の全四巻からなり「書林 熊建山梓行」とある。近衛本と国家図書館本には共通の祖本があり、互いに兄弟関係にあると考えられる。



しかし、近衛本が直接もとづいたテキストでは、首巻および巻一が既に欠落していたので、半留堂の楊玉琳は、巻二を巻一、巻三を巻二に変え、封面に『解夢靈書』と題し、まったく別の書であるかのように売り出した。その細工のあとが、各巻標題の数字の箇所にはのこっている。国家図書館本に比べて挿絵も写し忘れが多い。しかし、国内外ともに、ほかに所蔵を聞かず、また夢占いの資料自体もほとんど残っていないことを思えば、貴重な刊本といえるだろう。

(4) 図像黃牛經全書 上中下三巻 著者不詳 一帙一冊 明正徳五年(1510)刊、明嘉靖二年(1542)重刊 外寸二三・二×一二・五cm 板框一六・六×一一・五cm 明建安刊本、上図下文、十一行×十五~十七字、四周双辺、有界、版心黒口 刊記： 者太歳壬寅年四月吉日 日仰書叩土術士編集 廿一年孟夏 勤有堂新刊 備考：黃牛經病症目錄：書肆旧有黃牛明伶經，其明左誤者多。今有牧 悠君，求病京本，臚録校正，利行伝者，后享医者，分其神効，真方有其応，孰可万无一失。／皇明正徳五年大歳庚[午]年仲春校正刊行／巻頭図「賈相公図像牛經方論巻之二」／新刊図像黃牛經全書巻上／新刊牛經明經集中巻／新刊造父黃牛經巻之中／新刊造父黃牛經巻之下 富士川文庫 ス 28<186686>

上図下文形式の元刊本に溯ることができるテキストだが、覆刻に覆刻を重ね、はからずも明の版刻技術の悲惨さを表わす好例となっている。ただ、この書は富士川文庫本以外には所蔵を聞かず、その意味で貴重な書といえなくもない。唯一アメリカ議会図書館にも明刻本が収蔵されているが、刊記を欠き、同版であるかどうかは不明である。

(5) 飲膳正要 三巻(存一、三巻) (大元時代) 忽思慧(ホスフィ) 常普蘭奚(ブラルキ) 編集 一帙乾坤二冊 天曆三年／至順元年(1330)刊、成化十一年(1475)重刊、天明二年(1782)書写(外寸)二八・〇×一六・四

cm 抄本、一〇行×二〇字、無界 刊記： (第二冊末尾) 成化乙未鼎新刊行／奥書：元人飲膳正要，余質訪此書，幾乎十余年矣。遍索故家，屢徵好事，無有焉。以為此方亡伝本也。偶價望三英氏医官玄稿内，載蔵此書。因托侍御医劉君之子子廉，而物色之。望氏之書，尽在于江東葛飾菅庫置之。時三英氏即世既久，後嗣不愛読書，却不令人窺，竟不可得也。有日向陶菴氏，望氏門人也。嘗著本草釣衡考異。聞其家有伝本，子廉三詣，而始得之，各抄一部而蔵焉。旦与子廉約、非篤嗜如余二人，不許輒視云。天明二年壬寅春二月吉安子坦題／裏表紙見返し：隈水田揚子顯父 備考：「序」天曆三年五月朔日奎章閣侍書学士翰林直学士中奉大夫知制誥同脩国史臣虞集／「上表」天曆三年三月三日飲膳大医臣忽思慧進上、中奉大夫太医院使臣耿允謙校正、奎章閣都主管上事資政大夫大都留守内宰隆祥總管提調織染雜造入匠都總管府事臣張金界奴校正、資徳大夫中政院使儲政院使臣拜住校正、集賢院大学士銀青榮祿大夫趙国公臣常普蘭奚編集 富士川文庫 イ 419<705847>

『飲膳正要』の刊本は、北京大学に元刊本とみられる残巻が一種蔵されるほか、明景泰七年(1456)に景帝の命令によって、元刊本をそのままに内府で覆刻したテキストが静嘉堂文庫にあり、これが『四部叢刊続編』に影印で収められたことから、もっともよく知られている。台湾故宮院蔵本も景泰本とされているが、彫刻技術の荒さ、版木の摩滅などから判断して、静嘉堂本の後刻とみられる。本書は、すこしあとの成化十一年(1475)の刊本に忠実にもとづいた抄本である。成化十一年の刊本そのものは、こんにち残っておらず、存在したこと自体、従来ほとんど知られていなかった。しかし、この抄本から、成化本が景泰刊本とことなる系統の元刊本を覆刻したことがわかる。しかも、「聖なる語」の改行抬頭がモンゴル朝廷の書式にしたがってより厳密におこなわれており、成化本にもとづいた元刊本のほうが、好いテキストであ

った可能性が高い。

(6) 世医得効方 十九巻、目録一卷 (大元時代) 南豊州医学教授 危亦林撰、江西等处官医提挙 余賜山校正、建寧路官医提領 陳志刊行 後至元三年(1337)完成、至正三年(1343)刊、書写年不詳 三帙計二〇冊(二帙十九冊、一帙一冊) 二六・四×一八・二cm 抄本、一二行×一九字、無界 備考:「至元三年十一月江西等处官医学提挙司申太医院抄白」、「至元五年太医院識」、「至正三年仲夏建寧路医提領陳志序」、「至元四年王充耘序」、「太医院官僚名單」、「至元三年七月既望危亦林序」/各帙第一冊第一葉「宮崎架蔵之書」朱方印 富士川文庫 セ 8 <185695> / 富士川文庫 セ 173 <706065> 大阪府立図書館の石崎文庫に元建安刊本、およびそれを覆刻した明正徳元年(1506)書林魏氏仁実書堂刊本、朝鮮古活字本(甲辰活字)、内閣文庫に朝鮮版(世宗七年/洪熙元年(1425)覆元刊本)が蔵される。元刊本は、半葉十一行×二二字であり、本書は、直接には和刻本(台湾国家図書館蔵、この和刻本自体がめずらしい)を写したものであることがわかる。元刊本は「聖なる字」において四字抬頭、和刻本は三字抬頭であり、したがって本抄本は未知の元刊本に基づくと考えられる。前掲の『飲膳正要』の例といい、抄本を軽視できない所以である。

以上の書物の詳細については、『学びの世界 中国文化と日本』(京都大学附属図書館 総合博物館 大学院文学研究科 2002年10月)の図録解説を参照されたい。なお、この図録は、従来のものとことなって、文学研究科の協賛を得て、研究成果の一般社会への還元をより強く意識し、且ついに研究と直結する大学附属図書館の独自性を出せるか、模索した試みであった。全冊カラー、纏まった量の解説と最新の情報 現在、中国でも台湾でも、各所蔵機関の「顔」となる善本図録、目録の作成は、極めて熱心に行われている。四月から十二月まで八か月、時間、体力、気力ともにかかなり消耗したが、

同時に貴重書庫で長時間現物に触れ、手当たりしだいに調べること、異なる分野の研究者との意見の交換、まことに贅沢な経験をさせていただいた。書庫の中を歩き回る幸せは、現在奉職している人文研でもしばしば感じるものだが、目録から何か目的を持って探し、一つ一つカウンターから出してもらうという一方通行ではなく、書物が私たちに自分の存在をアピールしてくるのである。ふだん版本ばかり扱っていると、抄本は見た目に美しくなく敬遠しがちだったが、今回の選書によって、抄本の徹底的な調査の必要性を感じた。まだまだ書庫には、未知の刊本の系統を引くものがあるにちがいない。富士川文庫に意外に貴重なテキストが多く蔵されることも判明した。せっかくいいものをもっているのだから、研究しないともったいない。むろん保存、維持も大事だが、こうした発見の機会を、より増やしていただけるとありがたい。具体的には、展示会準備や古籍善本の扱い方、書誌学等を大学院の実習として組み込んでもいいように思う。というのも、とくに近年の文献の電子化によってモノそのものに対する常識、関心が失われつつあるように、感じるからである。それに毎年、展示会のきちんとした図録をつくっていくことは、不備の多い既存の目録を作り直す作業にもなるだろう。

(みや のりこ)

## 京大・図書系・一年目 新人職員による座談会 2002

2002年10月のある日。附属図書館の一室に、男女5名の若人たちが集まった。4月に新しく採用された、図書系の新人職員たち。図書館・図書室という職場に対して、どんなことを考え、どんなふうに戸惑い、どんな情熱を秘めているのか。率直な胸の内を聞いてみた。

「たくさんのことを教えていただいています」

進行：それでは、まず自己紹介もかねて、所属と現在の業務内容を教えてください。

中塚：情報学研究科図書室の中塚です。いまは主に雑誌の担当ですが、カウンター・ILLなどもろもろですね。工学部等の中では桂図書館を準備するサブグループというのがありまして、そちらでも雑誌の担当（図書室ごとに購入しているタイトルを調整するためのリスト作成等）をやっています。



赤木：赤木です。所属は人文科学研究所の図書掛、漢字情報研究センターの図書整理の担当です。8月からは現代中国書の遡及入力で、バイトが入力した新規書誌のチェックを主にやっています。中国の本は出版形態がよくわからなくて、非常に難しいです。掛長とか前任の方とかに、メールで質問したりしてます。合間を見て雑誌整理・ILLなどもやっています。センターの建物は国の登録有形文化財になっていて、

観光客がよく来てます。

高城：文学部整理掛の高城です。洋書目録の担当です。文学部では教室ごとに請求記号の体系が違いますが、10月からはその請求記号付与も一部担当することになりました。文学部では、古典籍も含めて、遡及入力が課題になっています。先輩たちはみなさん目録業務に詳しくていらして、たくさんのことを教えていただいています。

楠見：経済学部整理掛の楠見です。いまやっている仕事は和書目録で、主に新規受入の中国書と和書、あとは教官からの返却本などです。来年4月までに受入の仕事も覚えなないといけないことになっていて、和書の受入から慣れていって、洋書受入のほうへ移行していくという予定なんです。いまは洋書目録も少し手伝う機会があるのですが、洋書のほうの画面も見慣れておくという意味で、準備になっていると思います。私も、目録のことは主にまわりのみなさんに教わりながらやっています。あと、カウンターにはまったく出ていません。

筑木：法学部整理掛の筑木です。担当は洋書目録です。ほとんどが新規受入の図書ですが、ドイツ語とかフランス語とか、NCにヒットしないのが20%以上はあります。自分にとってはNCのヒット率は必ずしも高くないと思うのですが（笑）。僕もカウンターには出ていないです。

進行：カウンターに出てないと、学生に間違われたりしない？

楠見：私は多分間違われてると思います。場所によっては変な目で見られることもあるので、エプロンをして、職員ということをアピールするようになりました。

中塚：青いエプロンはやめたほうがいいですよ。生協に間違われる（笑）。

楠見：あと、古い返却本だと細かいほこりが積もってて、マスクをして作業することもあります。私はくしゃみが出るんで、鼻まで隠れるようなやつで。

赤木：僕も、配属直後の4月頃は咳がとまらなかったですね。書誌学者の林望先生は「本に触る者は早死にする」と言ってますね（笑）。

「本尽くしの人生です（笑）」

進行：では、図書館員になろうと思った動機・きっかけを教えてください。もしあれば、特に大学図書館・京都大学を選んだ理由もお願いします。

中塚：困りましたね、ないんですけど（笑）。先輩の紹介で、公共図書館でアルバイトしてたんですね。それをあわせれば、もう7年くらいずっと図書館で働いてますので、動機とかそういう問題じゃなくなってるといいますが、図書館職員として働いたのしさを日々経験してしまって、もうほかの職種を選ぶ理由が見当らなかったですね。もちろん、書庫に自由に入れるというようなメリットは感じてましたし、京大の蔵書量は魅力でした。

赤木：私は附属図書館のカウンターでアルバイトをしていましたから。自分の知識を活かせる場であるということもありましたし、本が好きですし。

進行：図書館でアルバイトや働いていた経験のある人は、どのくらいいますか？

高城：多分、全員経験あるはずですよ。

筑木：僕も大学の図書館でアルバイトをしました。もともと学術・研究に携わる仕事をしたかったんですけど、学生の時、論文を書くのに図書館を利用して、こういう学術情報と利用者とを結びつけるような仕事をやってみたいと思うようになりました。

中塚：素晴らしい。

進行：これ読んでる図書系の人たち、みんな喜ばはるね（笑）。

高城：模範解答ですね（笑）。

筑木：いや、ほんとですよ。

楠見：私は小さい頃から本が好きで、公共図書館のほかに書店のアルバイトもしてました、本尽くしの人生ですね（笑）。教員か、出来たら図書館員になれたらとは思ってたんですけど、倍率的に無理だよ、くらいに考えてたんです。でも、身近に真剣に図書館員を目指していた人がいて、その人が倍率のすごい公共図書館に現役で合格なさったんですね。それを見て、図書館員になるということが夢物語じゃないんやという感じがして、一念発起した、というのがきっかけかもしれないですね。館種は、公共と大学図書館って一長一短あると思うんですけど、学生のころから大学という環境に魅力は感じてて、ずっとこうだったらいいなと思ってましたし、公共図書館とかとちがって適度な異動がありそうなのも、自分に向いてる気がしました。

高城：私も図書館は好きだったので、桃山学院大学の司書講習を受けてはいたのですが、実際に就職できるとは思っていませんでした。でも、囑託として公共図書館で働いていたときに、同じ囑託の方で、種試験に合格し大学図書館に就職された方がいて、もしかしたら頑張って勉強すれば受かるかも、と思うようになりました。身近な人、って動機付けになりますよね。

「アルバイトのころと勝手がちがいますね」

進行：では、実際に仕事に就いてみての感想は、どうだったでしょうか。

高城：京大の職場環境はとても恵まれていると思います。素晴らしい先輩がたくさんいらっしゃるし、研修にも積極的に行かせていただけるし、講演・講習会・勉強会の案内もたくさん来ますし。何よりみなやる気のある人ばかりです。当然ながら自己研鑽が要求されていますし、



またそうするための環境が整っています。とても刺激的なところです。

筑木：僕は、カウンターでのアルバイトの経験はあったんですけど、目録という整理・管理系の仕事は初めてだったんで、こんなふうにやってたんや、とわかりました。NC登録だと、自分の仕事がすぐに全国に発信されてしまうから、ある意味怖い、責任重大だと思いますし、だからこそ逆に充実感もあります。

中塚：マイナスの感想も（笑）。ネットワーク関係の作業にずいぶん時間をとられるのは意外でした。緊急性の高い場合だと、手で端末の台数分ワクチンを注入しますし、そもそもセキュリティ管理に必要な情報を日常的に入手する作業は、どうしても勤務時間外になってしまいがちです。

赤木：特に不満はないんですけど。前任者の方が他大学へ行ってしまったこともあって、これまでどういうことがなされていたのか、いまいち把握できてないんです。情報のヨコのやりとりが円滑でないのも、気になります。アルバイトのころと勝手がちがいますね。

進行：京大で学生をしてたころと、職員として仕事に就いてからとで、変化は？

赤木：まったくないですね。気負わないようにしてます。

楠見：私はいまの職場や仕事内容が自分に合ってると思うんですけど、それだけに、あまりにもいまの仕事だけにのめりこむと、他のことは何もわからない状態のまま次のところへ異動することになってしまうのかな、という危機感があるんです。言い訳のできない勤続年数にならないうちに、いまのうちにちがうこともどんどん吸収しとかなないと、後々自分にドンツと返ってくるんじゃないかって。いまが居心地いいだけに、あとのこともきちんと考えとかなないといけないよ、と自分に言い聞かせてます。ちょっとですけど。

「新人用のオリエンテーションを」

進行：半年間仕事をしてみて、もっとこうしたらいい、こうすべきだというような提言はありますか。



筑木：先ほど赤木さんの言ってたように、タテ割りというか、自分の仕事の役割分担がきちりしていて、隣の掛や他の部局でどういう仕事をやっているのか、というのが判らないですね。それが判ると、自分の仕事をもっと合理的になったり、サービスがよくなったりするんじゃないかな、とも思います。それから新人として採用されたとき、いきなり 学部の 掛に配属されるとかではなくて、まず最初に、図書館が全体としてどういうシステムや体制をとっているのかとか、そういうことを教えてもらえるオリエンテーションをやってもらえたほうがやりやすかったと思います。

中塚：工学部等では、各図書室が集まって、桂図書館として統一した運営方針をつくっていくための議論を、図書職員間で重ねている状態にあります。ですが、そこで検討した結果を反映していけるような組織的枠組みがないんです。このルートをなんとかつakってゆかなければならないと思います。

赤木：具体的な話になりますが、なぜ請求記号を統一しないんだろう、と思います。利用者の立場からも職員側からも、部局によって請求

記号がちがうというのは扱いづらいと、切実に思います。どれに統一するかを選ぶのは難しいけど、なんらかの統一されたものは前提として欲しい。

高城：私は、教室によって違う分類、というのは見ていて興味が沸きます。だって研究しやすいように分類されているわけですから。全学の全分野の図書を統一するのは、ちょっと無理だと思います。もし統一したいなら、請求記号のどこかに専門の分類が必要でしょうね。

楠見：でも利用者の検索の仕方が、いまはもうピンポイントになってきてるから、分類の意味ってどんどん低くなってきてるんじゃないかな、と思ってて。特に細分類は。極端な話、受入順とか、10段階の区分のような曖昧なカテゴリーサイズでも、利用者は利用できる状況になってきてるんじゃないかなとも思うんですけどね。うちは閉架だし、入庫するとしても、検索してから入庫するから。開架にしているとそれなりに意味はあると思いますけど。あと、独自分類もその図書職員にとって便利だとされてるのかもしれないけど、その職員が10年20年居られたような時代はいいとして、いまみたいに異動が頻繁だと、職員のほうも把握できないでしょう？

赤木：職員が変わることで、本当に統一的に分類できてるのか、とか。

楠見：その専門分野を知らない職員が、独自分類を正しく付与できてるのかっていうのも、疑問。

筑木：広い範囲でとればいいんじゃないかな、と思う。民法なら民法で。そこにある、っていうことがわかればいいんじゃないかなって。

赤木：遡及入力していると、同じ本なのに全然ちがう分類が付いてるのが、ものすごく多いのに気付く。

高城：歴史のあるところほど大変。

楠見：母体が大きすぎて無理、かな。

筑木：昔の分も遡及して統一し出したら、終わらないですよ。

楠見：遡及入力と並行して早めにやったほうがいいかもしれないけど、整わないうちにやるのも・・・。

「新規書誌作成はやりがいありそう」

進行：ちょっと話題を変えて、もし自分がいまの部署に配属されてなかったとして、他のメンバーのどの部署に興味を持ちますか？（注：念のため、全員が「いまの部署が一番いい」と発言しています）



高城：新しい図書館が出来る過程に興味があるので、工学部。

中塚：目録はできるだけ早いうちに習得しなきゃいけないと考えてますので、いまのうちにロシア語とフランス語を勉強しておいて、多種多様な言語の多いという文学部へ。

赤木：新規書誌作成が多いという、筑木くんのところ。大変そうだけど、やりがいもありそう。

楠見：漢字情報研究センターで漢籍に埋もれてみたい。文学部もいいけど多種多様な言語は・・・（笑）

筑木：どこも一度は経験してみたいですけど、新しい図書館を作り始めるという工学部。

「いろいろなところをまわりたい」

進行：では最後のシメとして、今後の抱負を、無理のない範囲でどうぞ。

赤木：いまの職場が漢籍を扱っているところなので、その専門知識を身につけていきたいと思っています。

中塚：文献収集講座というのを工学部等の図書室でやるんですよ。今日も立て看板作りまし  
たし、テキストやホームページも作ります。図書職員でデータベースの使い方とかを説明するので、利用者教育関連のスキルを磨いてゆきたいですね。

筑木：いろいろなところをまわりたいですけど、いまやっと目録や受入のような管理部門の仕事を覚えはじめたところなんで、しばらくはその勉強を続けていきたいと思っています。

楠見：最終的には洋書目録も覚えたいといけ

ないんで、いまのうちにもうちょっと語学をがんばらないと、と思います。

高城：語学とコンピュータ関係の勉強は必須ですが、いろんなところを異動して全体を把握したいです。京大の図書館は将来どうなっていくのか、常に関心を持って自分なりに考えていたいのです。

赤木俊介 / 人文科学研究所図書掛

楠見牧子 / 経済学部整理掛

高城雅恵 / 文学部整理掛

筑木一郎 / 法学部整理掛

中塚弘人 / 工学部図書掛情報学研究科

(司会進行：江上敏哲 / 附属図書館電子情報掛)

#### 附属図書館について思うこと

文学部研修員 柴田芳成

私の附属図書館の利用の仕方として、学部生の頃は机で本を広げることもありましたが、最近は、書庫内で図書や雑誌を探す、あるいは文献複写の依頼をするという用件が大半です。その程度の利用でしかありませんが、以下に、感想を書きつけます。

・大学図書館の蔵書 試みに、OPACで「ハリー・ポッター」を検索したところ、既刊の4作品ともヒットし、いずれも「貸出中」(調査1件あり)で、予約が入っているものもありました。また、こちらは附属ではなく総合人間学部図書館ですが、村上春樹『海辺のカフカ』に予約が11件入っているという検索結果が出ました(平成14年12月17日)。各作品とも1冊だけの所蔵のようなので、近頃しばしば報じられる「図書館の大量購入と著作権」といった問題はなさそうですが、それ以前に大学図書館の蔵書としていかなるものかと思います。書店や一般図書館で容易に手にすることができる図書をいくつも購入するより、少しずつでも専門書を揃える方が大学図書館にふさわしいのではないで

しょうか。私には人文系の本のことしかわかりませんが、最近の研究書については、他大学と比較して、京大は必ずしも充実しているとはいえないように思います。また、京大の蔵書として、例えば、宮部みゆきや京極夏彦はどうだかなと思います(どちらも総人に所蔵あり)が、太宰治や三島由紀夫ならば抵抗ありません。採否にあたってどこで線引きをするかは難しい問題だと思いますし、利用者からの購入希望があれば、それに答える役割というものもあるかとは思いますが、採否に関わっておられる司書の方々の見識に期待します。

・片田文庫 二階の開架にきれいに並んでいますが、どのくらい利用されているのでしょうか。私の場合、以前の方が使い勝手のよいものでしたが、片田文庫と以前の開架図書との利用頻度の比較などはされているのでしょうか。とはいえ、以前のことを知らない学部生にとっては、片田文庫がずらっとあることの方が普通なのですね。

・図書館内の飲食 これは専ら利用者の側の問題になりますが、ドリンクコーナーの設けられた今でも、机の上にペットボトルを置いているのを見かけます。公の場所なので、そのくらいの約束事は守りなさい。

(しばた よしなり)

## 医師とイコールパートナーをめざすコメディカル図書室

医療技術短期大学部 庶務掛長 中 村 正 次

医療技術短期大学部は、昭和50年4月に併設短期大学として病院西構内に設置されました。図書室は昭和52年12月に前身の専門学校所蔵の資料を母体として南棟2階に開設され、現在は書庫、閲覧室、視聴覚室からなり医療技術や医学関係の資料を中心に約3万冊を所蔵しています。図書室の場所が教室や実習室に近いことから、学生が休憩時間にあわてて走り込んでくることもあります。書庫が狭くて電動式集密書架で2通路しかなく不便をかけています。

資料の中には、前身の「京都大学医学部附属看護学校」や「京都大学医学部附属衛生検査技師学校」と印の押された貴重な(?)古い資料も多くあります。昭和57年4月に理学療法学科と作業療法学科が設置され、関連の資料が収集されたために書庫が満杯となり、地下室と旧白眉寮にも一部の資料を保管しています。

これからの自学習や研究には図書・雑誌だけでなく視聴覚資料も必要であり、平成14年4月から閲覧室の隣室を視聴覚室にしてテレビ、ビデオ、CD、DVDが利用可能なAV機器を10

台設置しました。また、視聴覚資料のなかには教材だけでなく映画や音楽のソフトも配置しており学生たちから好評です。

利用時間は10時から18時まで(13時から14時は休室)でしたが、医療短大の学生は病院実習などで遅くなることから開室時間の延長希望がだされ、平成13年の6月から医療短大の学生アルバイトにより1時間延長して閉室時間を19時としました。また、平成14年11月からは昼間の1時間の休室も開室とし利用者へのサービス向上に努めています。

医療技術が急速に高度化・進展する中でコメディカルに対する教育の質的向上が必要となることから、本短期大学部も以前から4年制教育への移行を検討してきましたが、いよいよ平成15年10月の医学部保健学科設置(予定)に向けて作業中であります。本短期大学部の図書室も、医師とイコールパートナーをめざすコメディカルの図書室としてどのように発展させていくか、その将来構想を現在図書委員会にて検討中であります。(なかむら まさつぐ)





## 平成14（2002）年度大学図書館職員長期研修に参加して

附属図書館情報管理課受入掛 香 海 沙 織

大学図書館を取り巻く環境は、大きく変わりつつある。

日本における高等教育は、明治19年に公布された帝国大学令による帝国大学の創設、第二次世界大戦後の新制大学設置に次ぐ、大きな変革期を迎えている。情報化、国際化などの社会的転換期であると共に、高等教育の大衆化、18歳人口の減少、生涯学習社会への転換などの要因により、高等教育変革の必要性が高まりつつある。平成14年3月26日には、「新しい「国立大学法人」像について（最終報告）」が発表され、「従来からの大学改革の流れを促進し、活力に富み、国際競争力のある大学作りの一環」として法人化が検討されることとなった。

高等教育の変革に加え、情報通信技術の発展は、大学図書館に多大な影響を与えている。インターネットの急速な普及と情報のデジタル化は、学術情報の生産・流通・利用・再生産のサイクルに大きな変化をもたらしている。また、メディアの多様化に起因する資料購入費の不足、洋雑誌等資料の高騰は、コレクション形成の貧困化や学術情報源へのアクセス環境の不備等、大学図書館に大きなダメージを与えている。

これらの変化は、大学図書館における日常業務にも確実に影響を与えている。にもかかわらず、根本的見直しが必要な業務においてさえ、じっくりと考える時間も精神的ゆとりもないのが現状である。問題意識として積み重ねなければならない日常業務における疑問も、断片として胸中に蓄積するばかりである。特に海外の図書館員から受ける質問は、私の問題意識を増幅させ、出口のないまま淵のように堆積していく。「心理学を専攻していた人が、どうして工学系の図書室で働いているのですか。」「あなたの図書館のポリシーは何ですか。」「どうして日本の

大学図書館員は選書を行わないのですか。」

平成14年度大学図書館職員長期研修に参加させていただく機会を得た。「係長を中心とする中堅職員に対し学術情報に関する最新の知識を教授し、職員の資質と能力の向上を図ることに、大学図書館の情報提供サービス体制を充実させる」ことを目的とした、文部科学省・図書館情報大学共催の研修である。今年度は、全国から37名の大学図書館員が参加した。

この研修は、講義を中心に、共同研究討議、施設見学から成る。授業の内容は、1) 大学図書館の管理・運営、2) 大学改革と図書館、3) 電子図書館的機能の整備とその推進、4) 電子的資料の導入、5) 国立情報学研究所の活動、6) 多様化する情報サービス、7) 社会の変革と大学図書館、等多岐にわたった。全体を通じて感じたのは、大学図書館においても、自ら企画運営する主体性の育成が必要であるということである。それぞれの大学の特性や条件に合わせた魅力ある図書館を運営していくためには、ミッション・ステイトメントが不可欠である。何のために図書館はあるのか、図書館は何ができるのか、図書館はどこへ向かおうとしているのか、変革の時代だからこそ、しっかりと主体的に言葉で提示する必要がある。

心の中の「断片」が解決されることはなかったが、この研修を通じてそれをどう扱えばいいのか少し理解できたような気がする。3週間にわたる研修は、日常業務を離れて大学図書館について考える貴重な機会となった。末筆ではあるが、この研修でお世話になった方々に心より御礼申し上げたい。

（どんかい さおり）

## 教官著作寄贈図書一覧（平成14年5月～11月）

所属等	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
文学研究科 助教授	家入 葉子	Negative Constructions in Middle English	九州大学出版会	2001
霊長研 教授	松沢 哲郎	Chimpanzees of Bossou and Nimba 1976-2001	Primate Research Institute, Kyoto University	2002
霊長研 教授	松沢 哲郎	アイとアユム 母と子の700日	講談社	2002
総人 非常勤講師	川本 正知	中央アジアにおける共属意識とイスラムに関する歴史的研究	新免 康	2002
人文研 教授	麥谷 邦夫	中國中世社會と宗教	道氣社	2002
留学生 センター教授	村瀬 哲司	A Zone of Monetary Stability	Asia Pacific Press	2002
文学研究科 教授	夫馬 進	中国明清地方档案の研究	京都大学大学院文学研究科東洋史研究室	2000
総人教授	有福 孝岳	哲学の立場	晃洋書房	2002
工学研究科 教授	田中 一義	分子ナノテクノロジー-	化学同人	2002
生態研 教授	和田英太郎	流域管理のための総合調査マニュアル	京都大学生態学研究センター	2002
名誉教授	小林 哲也	国際文化学	アカデミア出版会	2002
名誉教授	高木 久雄	ドイツ文学散策	ナカニシヤ出版	2001
理学研究科 教授	西嶋 光昭	表面反応の微視的機構	(株)アイピーシー	2002
総人教授	丹羽 隆昭	恐怖の自画像	英宝社	2000
総人教授	丹羽 隆昭	蜘蛛の呪縛	開文社出版	2001
総人教授	池田 浩士	ドイツの運命	柏書房	2001
工学研究科 教授	森澤 眞輔	土壌圏の管理技術	コロナ社	2002
工学研究科 教授	今中 忠行	微生物利用の大展開	エヌ・ティー・エス	2002
名誉教授	梅棹 忠夫	行為と妄想	中央公論新社	2002
工科学研究科 助教授	鈴木 亮輔	計測工学	昭晃堂	2002
文学研究科 教授	石原 潤	四川省西昌市の発展	京都大学大学院文学研究科地理学教室	2002
名誉教授	田中 昌人	あの頃の子どもたち	クリエイツかもがわ	2002
人文研 教授	高田 時雄	西域行記索引叢刊 1,2,3	松香堂	99-2001
経済学研究科 教授	藤井 秀樹	現代企業会計論	森山書店	1997
名誉教授	坂口 守彦	水産物の安全性	恒星社厚生閣	2001
名誉教授	亀谷 是	米輸出大国・タイ米産業の光と影	富民協会	1991
名誉教授	亀谷 是	アメリカ米産業の素顔	富民協会	1988
名誉教授	亀谷 是	農業投資の理論と戦略	富民協会	1977

所属等	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
名誉教授	亀谷 是	農協生活活動の新方策	全国共同出版	1991
名誉教授	亀谷 是	農業投資の経済理論	(財)農林統計協会	1975
名誉教授	亀谷 是	米産業の国際比較	養賢堂	1991
名誉教授	亀谷 是	農業における投資・財政・金融の基本問題	養賢堂	2002
教育学研究科教授	川崎 良孝	ボストン市立図書館はいかにして生まれたか	京都大学図書館情報学研究会	1999
教育学研究科教授	川崎 良孝	公教育と図書館の結びつき	京都大学図書館情報学研究会	2002
教育学研究科教授	川崎 良孝	図書館・表現の自由・サイバースペース	(社)日本図書館協会	2002
教育学研究科教授	川崎 良孝	学校図書館の検閲と選択	京都大学図書館情報学研究会	2002
名誉教授	礪波 護	平岡武夫遺文集	中央公論事業出版	2002
高等教育教授システム開発センター講師	溝上 慎一	大学生論	ナカニシヤ出版	2002
総合人間学部助教授	河崎 靖	低地諸国(オランダ・ベルギー)の言語事情	大学書林	2002
人・環教授	山内 淳	EPR in the 21st century	Elsevier Science	2002
名誉教授	山田 慶兒	「中国医学はいかにつくられたか」のハングル語翻訳版	Science Books Co.	2002
名誉教授	上田 亮	The Road to Chaos -II	Aerial Press	2001

## シネマ・クラシック

2003年1月から3月上映案内

**僕の村は戦場だった** (1962年 ソ連作品) 1月9日(木) 第1回上映14:00~15:35 第2回上映15:40~17:15

少年は蝶になって空を飛んだ。「お母さん、かっこうが鳴いていたよ」  
少年は夢からさめた。ここは戦場なのだ。重苦しい戦場の現実と子供らしい少年の夢のコントラストが胸に刺さる。世界中が、30歳のタルコフスキーを映像の詩人と呼んだ。(原 淳一郎)  
監督: アンドレ・タルコフスキー 脚本: ウラジミール・ボゴモロフ  
撮影: ワジーム・ユーソフ 音楽: ヴァチスラフ・オプチニコフ  
出演: ニコライ・ブリャーエフ ニコライ・グリニコ 他

**道** (1954年 イタリア作品) 2月6日(木) 第1回上映14:00~15:45 第2回上映15:50~17:35

フェリーニの代表作。もの悲しいニノ・ロータの名曲「ジェルソミーナ」のテーマに乗って展開されるジュリエッタ・マシーナの名演は見るものの胸を打つ。ヴェネチア映画祭サンマルコ銀獅子賞、アカデミー賞外国映画賞受賞。  
監督: 原作: 脚本: フェデリコ・フェリーニ  
出演: ジュリエッタ・マシーナ アンソニー・クイン リチャード・ベースハート

**カリガリ博士** (1919年 ドイツ作品 サイレント) 3月6日(木) 第1回上映14:00~15:10 第2回上映15:15~16:25

あらゆるホラー映画の出発点になったドイツ表現主義の頂点。不安定な空間に呪われた加害者と被害者の幻想が交錯する。あるドイツの田舎に起きた連続殺人事件。息をのむスピーディな展開、博士の正体が暴かれてゆく。(淀川長治)  
監督: ロベルト・ヴィーネ 原作: 脚本: カール・マイヤー ハンス・ヤノヴィツ

**会場: 附属図書館3階ホール**

..... **図書館の動き** .....

- 8月8日 全学オープンキャンパス（～9日、2,140名参加）
- 26日 法人格取得問題附属図書館長懇談会（於：東大）
- 9月3日 附属図書館ドリンクコーナー設置
- 5日 国立大学図書館協議会臨時常務理事会（於：東大）  
第2回組織問題検討タスクフォース会議（於：東大）
- 6日 全学図書系事務連絡会議
- 11日 京都図書館大会（於：同志社大学）
- 10月3日 国立7大学附属図書館長会議、国立7大学附属図書館部課長会議（於：東北大学）
- 4日 国立7大学附属図書館協議会（於：東北大学）
- 8日 メタデータ・データベース共同構築事業説明会（NII主催、於：農学部）
- 10日 東京工業大学附属図書館より研修出張者来館
- 16日 静岡県立伊豆中央高等学校60名来館  
筑波大学附属図書館より研修出張者来館
- 18日 国公立大学図書館協力委員会（於：早稲田大学）
- 21日 中国上海図書館来館
- 24日 国立国会図書館より研修出張者来館  
中国西北農林科学技術大学訪日団来館
- 25日 法人化に向けての図書業務検討委員会
- 28日 中国大学図書館担当者訪日団（11名）来館
- 30日 平成14年度京都大学附属図書館公開展示会（～12月1日、於：京大博物館）  
国立大学図書館協議会常務理事会（於：東北大学）
- 31日 国立大学図書館協議会賞受賞者選考委員会、国立大学図書館協議会理事会（於：東北大学）
- 11月1日 韓国成均館大学事務職員（10名）来館
- 2日 平成14年度近畿地区国公立大学図書館協議会講演会
- 5日 平成14年度第4回商議會
- 7日 東京大学附属図書館・教養学部図書館より研修出張者来館
- 12日 大学図書館職員講習会（～15日）
- 20日 上海水産大学訪問団来館
- 21日 展示会記念講演会「学びの世界」（127名）
- 25日 中国教育部中国大学教職員訪日団来館
- 28日 私立大学図書館協会東海地区協議会図書館員（40名）来館
- 12月2日 附属図書館周辺環境整備
- 3日 中国教育部国際交流合作司来華処等（74名）来館
- 5日 第15回国立大学図書館協議会西地区シンポジウム（～6日、於：九州大学）
- 6日 北陸先端科学技術大学院大学より研修出張来館
- 9日 全学図書系事務連絡会議



## 展示会を終えて

平成14年度附属図書館公開展示会は、当館所蔵資料『幼学指南鈔』が重要文化財の指定を受けたことを記念して、「学びの世界 中国文化と日本」というテーマのもとに、平成14年10月30日（水）から12月1日（日）の間、共催した総合博物館を会場に開催された。会期中の入館者数は2321人であった。（総合博物館の入館者数）

11月21日（木）に開催した記念講演会は、「学びの世界」というテーマで、本学大学院文学研究科木田章義教授と同木津祐子助教授が講演した。参加者は127名であった。



## 人事異動

平成14年8月31日付

辞職

教育学部図書掛	竹村 心
---------	------

平成14年10月1日付

転出

大阪教育大学附属図書館	上野 恵（附属図書館情報サービス課資料運用掛）
-------------	-------------------------

転入

附属図書館情報サービス課資料運用掛	中谷実邦子（大阪教育大学附属図書館へ）
教育学部図書掛	吉松 伸恵（九州大学附属図書館）

採用

工学部物理工学系図書室	原竹 留美
-------------	-------

## 目次

e-プリント・アーカイブの衝撃	1
附属図書館の珍本 公開展示『学びの世界』の選書から	6
京大・図書系・一年目 新人職員による座談会 2002	10
附属図書館について思うこと	14
医師とイコールパートナーをめざすコメディカル図書室	15
平成14（2002）年度大学図書館職員長期研修に参加して	16
教官著作寄贈図書一覧	17
シネマ・クラシック	18
図書館の動き	19
展示会を終えて	20
人事異動	20

### 編集後記

この号がお手元に届く頃は、新しく希望を持った2003年が始まっていることを願っています。

相互交流の館報としていきたいと考えています。ご意見をお寄せください。（C）